中日文化论丛

ZHONG RI WEN HUA LUN CONG

1995

ZHONG RI WEN HUA LUN CONG

杭州大学日本文化研究中心
神奈川大学人文学研究所 编

-55
2

杭州大学出版社

中日文化论丛——1995

杭州大学日本文化研究所
神奈川大学人文学研究所 编

*

杭州大学出版社出版发行
（杭州天目山路 34 号）

*

杭州大学出版社电脑排版部排版
浙江上虞印刷厂印刷
850×1168 毫米 1/32　7.5 印张　190 千字
1996 年 12 月第 1 版　1996 年 12 月第 1 次印刷
印数：0001—1000
书号：ISBN 7-81035-737-9/G·251
定　价：10.00 元

目　录

上编　江南与日本

留学吴越的智藏…… 王　勇(3)
天台宗在日本的传播与影响 …… 屠承先(21)
论 14 至 17 世纪宁波港在中日经济文化交流史上的
　　重要地位 …… 徐明德(36)
郑和出使日本考略 …… 何忠礼(53)
明代抗倭传说与沿海特异风俗 …… 吕洪年(64)
论有关西湖的白话小说 …… (日)尾上兼英(73)
清末浙江的对日学事考察 …… 吕顺长(88)
杭州福寿堂事件后中日各方的反应…… 何扬鸣(100)
论谢六逸的日本文学研究…… 谢志宇(113)
中日韩的冥婚比较…… (日)广田律子(126)
日本的占卜与预言文化…… 程绍海(141)

下编　东西方文化交流

尼采哲学在中国的命运…… 庞学铨(161)
明治维新后日本对法国文学的摄取…… (日)仓田清(173)
日本的英学引进与中国的英学…… (日)高野繁男(184)
日本引进西方科学文化的思想基础…… 郑彭年(198)
附录:论文提要 …… (210)
后记…… 王　勇(232)

目　次

上編　江南と日本

呉越に留学した智蔵…… 王　勇(3)
中国天台宗の日本に於ける流布と影響 …… 屠承先(21)
中日経済文化交流史上の寧波港(十四～十七世紀)
…… 徐明徳(36)
鄭和出使日本考略 …… 何忠礼(53)
明代の倭寇退治伝説と沿海地域の特異風俗 …… 呂洪年(64)
金明池と西湖 …… (日)尾上兼英(73)
清末浙江省の対日教育視察 …… 呂順長(88)
杭州「福寿堂事件」とその後の中日双方の反応
…… 何揚鳴(100)
謝六逸の日本文学研究についての考察…… 謝志宇(113)
中日韓の死霊結婚…… (日)広田律子(126)
日本の卜・予断文化について…… 程紹海(141)

下編　東西方文化の交流

中国におけるニーチェ哲学の受容 …… 龐学銓(161)
太平洋戦争以後におけるフランス文学の受容
…… (日)倉田清(173)
日本における英学の移入と中国英学…… (日)高野繁男(184)
日本の西洋科学文化を受容する思想基礎…… 鄭彭年(198)
付録:論文要旨 …… (210)
あとがき…… 王　勇(232)

上编　江南与日本

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

吳越に留学した智藏

王　勇

運命を神仏に託して、死神と背中合わせの渡海をしのぎ、命からがらと唐土にたどりついた留学僧は、途中ながら風浪に呑みこまれて雄心をむなしくした同伴にくらべれば、幸運であった。しかし帰国の生還率はともかくとして、これからはじまる数年ないし数十年の異国生活のなかで、さまざまな難関と思いがけぬ試練が、かれらを待ち受けていたことはたしかである。

留学僧といっても人間であるから、老弱・病気・貧困・孤独など遠遊の客につきものの悩みはまぬかれない。また復雑な人間関係によって生じる仲間同士の齟齬・嫉妬・迫害なども、かれらの求法生活を虎視眈眈とおびやかす。狂人をよそって仲間の迫害からのがれようとした智蔵の経歴は、入唐僧のかくれた恥部を赤裸々にさらし出している。

一、智蔵の入唐

文献に名をとどめながら、入唐年次のはっきりしない留学僧は、遣隋使にしたがった恵雲・恵済・恵光・霊雲などをはじめ、遣唐使時代にも数多くいた。三輪宗の僧智蔵もそのなかの一人にかぞえられる。

三輪宗が日本へはじめて伝わったのは、推古天皇三十三年(六二五)の正月とされる。この年、高麗国から僧慧灌がはるばるとおくられてきた。慧灌はかつて隋にわたって、嘉祥大師吉蔵(五四九～六二三)より三輪の学を修めたとつたえられる(『三国仏法伝通縁起』)。日本に来てからは、飛鳥の元興寺に久しく住して三輪宗を講説し、朝廷から僧正に補任された。凝然の『三国仏法伝通縁起』は

> 慧灌僧正、三輪宗をもって福亮僧正に授け、福亮は智蔵僧正に授く。智蔵、海を越えて入唐し、重ねて三輪を伝う。遂に乃ち帰朝して、伝うる所を弘通し、これ第二伝なり。智蔵、法を道慈律師に授く。

と、三輪宗の師資相承の系譜をしるしている。

福亮をさしおいて慧灌を初伝、智蔵を二伝とするのは、二人とも学問の総仕上げを本場の中国にわたって完成させたからであろう。ちなみに三輪宗の三伝とされる道慈も、大宝期の遣唐使にしたがって入唐求法の経歴をもっている。

智蔵の入唐求法について、『懐風藻』の釈智蔵伝に「淡海帝の世に、唐国に遣学す」とあるのみで、正確な年次はつたえられていない。淡海(近江)帝とは天智天皇のことだから、在位中(六六二～六七一)に出航した遣唐使は、天智六年(六六七)と天智八年(六六九)の二回あったが、前者[1]は伊吉博徳・笠諸石を送使として司馬法聡らを百済に送りとどけてから帰国したから、智蔵の乗りこんだのは河内鯨を大使とする後者の船だったのであろう。

河内鯨らは唐の高麗平定を賀するために遣わされた使節で、同年十一月には中国についており(『冊府元亀』)、翌年(六七〇)三月の「高麗を平ぐるを賀す」(『唐会要』など)る朝会に参列した。

天智八年の遣唐使の渡海コースについて、従来は不明とされるか、あるいは北路と推定されてきた。もし智蔵がたしかに留学僧として使節団のメンバーに加わっているならば、『懐風藻』の釈智蔵伝によって旧説の再考を必要としてくるかもしれない。

時に呉越の間に高学の尼あり。法師(智蔵のこと)尼に就きて、業を受く。

中国では唐にいたって、三輪学の中心は北方の長安にあり、智蔵が江南の呉越に遊学したのは、なんらかの事情があったのではないか。北路をとって入唐したとすれば、いったん長安に入って、それからわざわざ南下して三輪学のさして盛んでなかった呉越に、学問をもとめることになる。長安にとどまって名師をたずねて勉学すればもっと効果的であったのに、そうしなかった理由は、いま一つ釈然としない。

いっぽう南路をとって入唐すれば、長安入りのメンバーを大使以下の数十人に限定する慣例があるから、留学僧をふくむ随行員の大半は現地待命とならざるをえない。推測の域を出ないが、智蔵はこの待命のあいだに現地の「高学の尼」に出あって、師事することになったことも考えられる。時代はだいぶ降ってしまうが、最澄や円載などもこのようなケースで、江南の諸師について学んだのである。

もっとも最澄と円載がもとめようとする天台学の本場は江南にあり、智蔵の場合とはおなじく論じることはできないが、遣唐使の帰帆が明州から出帆するまでのわずかな日数を利用して、近くの越州におもむき、順暁より密教を受法したのは、最澄の本心ではなかったのであろう。密教を学ぼうとすれば、空海のように長安へいって、青竜寺の恵果の門下に投ずるべきだからである。

こうして見てくると、呉越の尼僧に三輪学を習うようになっ

た智蔵は、長安から南下してきたとは考えられない。遣唐使船の漂着した現地にとどまり、長安への道を絶たれての便宜策か、それとも別の理由があったかもしれない。このことは後ほどあらためてふれよう。

二、狂僧を装う

呉越の地にどとまって碩学の尼僧より仏法を習うこと数年、学業抜群の誉れあり、同伴の学僧からそねまれる破目になってしまった。そこで、身の安全を案じ、狂態をよそって迫害からのがれようとした。しかも想像を絶する悪環境にあって、留学の使命をわすれずに写経に専念しつづけた。

このあたりの事情は『懐風藻』の釈智蔵伝に詳しくのべられているから、関連の一節をひいておく。

> (法師尼に就きて、業を受く)六七年の中に、学業穎秀なり。同伴の僧ら、すこぶる忌害の心あり。法師察りて、躯を全くせむ方を計り、ついに被髪陽(「佯」に同じ、「偽る」の意)狂し、道路に奔蕩す。密びに三蔵の要義を写し、盛るるに木筒を以てし、漆を著けて秘封し、負担して遊行す。同伴軽蔑し、鬼狂なりと以為い、ついに害を為さず。

学業が同伴を抜きんでているのが災いのもととなって、身の上に危険をおよぼすのをいち早く察知した智蔵は、頭髪をむぞうさに解きちらし、狂人のふるまいをして路上を暴走する。しかしこの仮面のうらには、寸陰をおしんで経・論・律という三蔵の教典をひたすらに書写する留学僧の感動すべき姿がかくされているのである。

そして、大事な写経をいつか日本に持ちかえるべく、木の筒に

おさめ、湿気をふせぐために漆で密封し、帰国のチャンスを待機しつつ、それをかついで各地をめぐりあるく。同伴から加えてくる暴行をおそれて、そこまで苦心して人間としての正当な権利をみずから放棄してしまったのである。

わが身を「鬼狂」に仮装したおかげで、智蔵は屈辱を呑みながら生きのびることができた。さもしなければ、かの長安醴泉寺の仏経の訳場に日本人として唯一に名をつらねた霊仙三蔵とおなじく、智蔵もおそらく非業の死を遂げていたのであろう。もっとも霊仙の最期については、円仁の『入唐求法巡礼行記』に「人から薬殺をはかられ、毒にあたって亡くなった」と伝聞を伝えるのみで、下手人は永遠のなぞとなっている。

霊仙の命取りとなったのは、日本から送られてきた砂金が目当てだったのか、それともその非凡な才能へのねたみか、今となってはいずれも憶測の域を超えない。承和期の遣唐使に加わった留学僧の円載について、金銭着服や同胞謀殺などの疑惑がかけられており、さらには尼僧を犯し子息まで設けていたスキャンダルがささやかれていたが、これらは別の機会であらためて取りあげることにして、ここでは詳述しない。

留学僧をめぐって演出される暗闘は、霊仙と円載の場合もそうだったろうが、名(嫉妬)と利(金銭)によって触発されることが多かったらしい。ところで、智蔵をして狂僧を装おわせたのは、果して同伴の留学僧からのねたみだけなのか。それとも別の事情が復雑にからんでいるのか。もう少し真相をさぐってみたい。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

三、呉人の出自

智蔵の出自に関する伝記はきわめて少なく、片言隻語の記載があっても、互いに矛盾するところがすこぶる多い。そのなかから虚偽を剥ぎとり、真実を抽きだすことは、危険な作業であり、かつ至難のわざといえる。これを覚悟のうえで、管見のおよんだ零細な資料ながら、いくつか取りあげて、分析を試みてみる。

『懐風藻』の釈智蔵伝は「智蔵師は、俗姓禾田氏なり」とつたえている。禾田氏はすなわち粟田氏のことで、和珥氏の系統をひき、『和名抄』に出てくる山城国愛宕郡の上粟田・下粟田を本郷とする氏族だったと考えられる。

この一族から遣唐使とかかわりのある人材が何人か文献に出ている。粟田真人は大宝期の遣唐執節使として入唐し、『旧唐書』の日本伝に「好んで経史を読み、文を属するを解し、容姿温雅なり」と賛えられている。粟田道麻呂は粟田真人に擬する説もあるが[2]、唐楽の「破陣曲」を日本につたえた人物である。

そのほか、承和期の遣唐使に録事をつとめたとされる粟田碓雄、延暦二十四年(八〇四)にかえってきた留学生の粟田飽田麻呂、遣唐大使藤原常嗣の従者として入唐し、絵画の才能をフルに発揮してみせた粟田家継なども、青史にその名をとどめている。

ところが、智蔵の出自をこの大和時代以来の名門につなげるには、慎重な態度を取るべきである。というのは、『懐風藻』にみえる右の伝記を根本からくつがえす記録がほかにあるからだ。

一説によれは、智蔵はもとより土着の日本人ではなく、中国から渡ってきた呉人であるという。または三輪宗の福亮僧正が在俗のころ生んだ子息だったともいわれている。この説は、師蛮が江戸の元禄十五年(一七〇二)に『元亨釈書』の補欠を期して著

した『本朝高僧伝』巻一の和州法隆寺沙門智蔵伝にとなえられている。

釈智蔵は、呉国の人。福亮法師の在俗の時の子なり。

ほぼおなじ内容の記述は『三輪祖師伝』にもみえ、白鳳元年(六七二)僧正となった智蔵は、じつは福亮の在俗時代の子供だったとしるされている。

『本朝高僧伝』の右の一文は、読みようによっては、「釈智蔵は、呉国の人福亮法師の在俗の時の子なり」とも理解されうる。そのばあいは、智蔵の国籍を問題にせず、その父親が「呉国の人」だったということになる。

いずれにしても、智蔵の出自のなぞを解きあかすカギは、どうもその生みの親とされる福亮に握られているらしい。それでは、福亮とはどんな人物かを詮索してみよう。

四、呉僧福亮

大化元年(六四五)八月に発布された僧尼詔で、福亮は十師に名をつらね、仏教界の重鎮となっている。『日本書紀』は沙門の狛大法師・福亮・恵雲・常安・霊雲・恵至、そして寺主の僧旻・道登・恵隣・恵妙といった順に、十師の名をあげてのち、

この十師らは、よく衆の僧を教え導きて、釈教を修行うこと、かならず法の如くならしめよ。

と、孝徳天皇の大きな期待をつたえている。

中国では、北斉の天保年中(五五〇～五五八)に昭玄十統の先例があったが、唐の武徳二年(六一九)十大徳を任命して僧尼を統摂させるという仏教界の自治制度がほぼ完成をみるにいたった。日本でこれまでの僧綱制をこの十師制にかえたのは、遣隋使

や遣唐使そして渡来人らのもたらしてきた中国の最新情報にもとづいたものと考えられる。

この十師のうち、素姓のはっきりしない恵隣と恵妙とをのぞけば、外国留学の経歴をもつ人は、およそ半数をうわまわる。恵雲について、『日本書紀』舒明十一年(六三九)九月に「大唐の学問僧恵隠・恵雲、新羅の送使に従いて京に入る」としるされ、霊雲と僧旻が舒明四年(六三二)唐の送使高表仁らとともに対馬に到着したことも、『日本書紀』の同年八月の記事にみえる。

宇治橋断碑によって知られる道登は入唐留学生ではないが、『日本霊異記』(上)第十二話によれば、高麗に留学し、元興寺に住すとある。やや考証を必要とするのは、常安と恵至のふたりである。

常安について、日本古典文学大系『日本書紀』は「南淵請安と同人か」と頭注している。常安と請安の発音はおなじであることはいうまでもない。もしこの推測があたっているならば、常安は僧旻[3]とともに、推古十六年(六〇八)九月に小野妹子にしたがって入隋した留学僧であった。

恵至の名前は右の任官記事以外にあらわれてこないが、もし白雉三年(六五二)四月に内里に召されて、『無量寿経』を講説するとき「論議者(問者)」をつとめた恵資その人だったとすれば、留学の経歴はつたえられていない。

かく見てきたように、十師のなかで、恵雲・霊雲・僧旻・道登に常安を加えて、留学僧はじつに五人をしめている。つづいて、狛大法師と福亮の生い立ちをさぐってみよう。

狛は高麗とも書き、狛大法師は半島系の渡来僧であろう。『太子伝補闕記』に皇極二年(六四三)弓削王を殺すとある大狛法師とおなじ人物かもしれないが、確証はない。河村秀根の撰した『書紀集解』および飯田武郷の書いた『日本書紀通釈』は、「狛大

法師福亮」を連続した表現とみて、福亮と同一人としている。

しかし、このような捉えかたをすると、十師の人数が一名足りなくなるばかりでなく、現存する福亮の伝記から、この仮説を支持するようなものは、なに一つみあたらない。ましてや、『扶桑略記』第四・斉明四年(六五八)の記事に、福亮は「呉僧」としるされている。

> 中臣鎌子(鎌足)、山科の陶原の家に於て、呉僧元興寺の福亮法師〈のちに僧正に任ず〉を屈請して、その講匠と為し、甫めて『維摩経』の奥旨を演ぶ。その後、天下の高才、海内の碩学、相撰び請い用ふるは此れの如し。

以上のようにみてくると、仏教界の最高リーダーに十人の高僧を任命するさいに、渡来系の血筋と留学の経験者を選別の決定的な条件としていたことがわかる。それはまた唐風傾倒の雰囲気を濃厚にもつ大化改新の性格とも矛盾しない。

したがって、『扶桑略記』の福亮呉人説をうたがう根拠はどこにもない。しかもこの説は、さきにあげた「釈智蔵は、呉国の人。福亮法師の在俗の時の子なり」とある『本朝高僧伝』の記事によって、さらに補強されるのである。子息の智蔵が「呉国の人」ならば、父親の福亮は当然のことながら、呉の出自でなければならない。

五、福亮の伝記

福亮の生い立ちや事績に関する伝記資料は『日本書紀』と『扶桑略記』のほかに、『法起寺塔露盤銘』(『聖徳太子伝私記』にひかれている)・『維摩会縁起』・『三輪祖師伝』・『三国仏法伝通縁起』などからも拾われる。それらの断片的な記述を継ぎあわ

せてみると、福亮の人物像がかすかに浮かびあがってくる。かれの関係事績を時間順にならべてみよう。

○揚子江の下流あたりに生まれた福亮は、日本にわたってきた年次は詳らかでないが、そのときは在俗の身であったと思われる。

○何時かはっきりしないが、日本に永住することを覚悟し、改姓して熊凝氏となのる。

○のちに仏門に身を投じ、高麗僧の慧灌に師事して、三輪宗を学ぶ。

○舒明十年(六三八)、聖徳太子の御分として弥勒仏像をつくり、法起寺の金堂を建立しようとした。

○大化元年(六四五)八月、十師の一人にえらばれる。

○斉明四年(六五八)、中臣鎌足の請いをうけて、山階の陶原の宅で『維摩経』を講じ、日本の維摩会の先例をひらく。

○これより以降、僧正に任ぜられる。

福亮の渡来年次についてまったく所伝はないが、舒明十年(六三八)をくだらないことはうたがわれない。高麗僧の慧灌に師事して三輪宗を学ぶまでは、在俗していたと思われるから、慧灌の来日した推古三十三年(六二五)をさらにさかのぼらせることができるかもしれない。

また、福亮の没年に関しても、渡来年次とおなじく頼るべき手がかりは皆無といってよい。斉明四年(六五八)まで生きていることは、この年に『維摩経』を講じた記録によって確かめられるが、もしそれ以後になった僧正の任官時期がわかれば、もう少し事実に近い推定ができるであろう。

日本で、僧正と僧都をもうける僧綱制度は、推古三十二年(六二四)四月に「観勒僧をもって僧正とす。鞍部徳積をもって僧都とす」(『日本書紀』)るのに濫觴する。百済僧の観勒について、

高麗僧の慧灌は僧正の第二号となっている。ちなみに僧都第一号の栄光にかがやいた鞍部徳積も渡来系の出自で、その先祖は司馬氏をなのっていた。

ところで、この僧綱制度は大化元年(六四五)の十師制にかえられてから立ち消えとなったが、天武二年(六七三)十二月以後、僧正と僧都の任命が再びあらわれ、律令の僧綱制がととのえられていく。

福亮の僧正任命は、僧綱制が復活してからあとのことにちがいない。いっぽう『本朝高僧伝』によれば、智蔵が僧正に補任されたのはまさにこの年(六七三)のことであったから[4]、福亮の任官もこの時期をくだらないと考えるのは穏当であろう。

もちろん、天武二年の僧正任命は文献上の初見であるだけのことで、それより以前から復活していたことは十分に考えられうる。もし福亮の僧正補任は、僧綱制が整備される前段階のことだったと推測すれば、かれの没年も天武二年を大幅に繰りあげることは難しい。

六、智蔵は混血児か

智蔵は福亮の子息だとすれば、いつ生まれたのか。生地は父の本貫地の中国か、それとも渡来先の日本だったのか。次にこれらの問題をふくめて、智蔵の血筋を検証してみよう。

『本朝高僧伝』の伝記では、読み方によって智蔵本人が呉国の人であるとも、または呉人の子息であるとも理解できるが、『和漢三才図会』の道慈伝は「呉の智蔵に事え、三輪学を禀く」と智蔵の呉人説をはっきり載せている。ただしこの類書は、智蔵の伝記に入隋して吉祥に学ぶことや雨乞いして天下に大雨を降ら

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com